

ワクワク留学体験記

フランス INRIA 国立研究所

川崎 洋 (鹿児島大学)



1. はじめに

世界は狭くなり海外に行くことは全く珍しくなくなった昨今ですが、それでもやはり海外の見知らぬ土地にある程度長く住むと、短期滞在では見えてこないその地の風習に気付いたり、また逆に普通と思っていたことが実はそうではないことに気付かされたりと、その価値は今も大きいようです。

特に私のように、島国日本で、外国人のほとんどいない環境に慣れた体には、そういう発見やカルチャーショックに日々驚いているうちに、あっという間に帰国の日を迎えてしまった感じでした。

今回、私が滞在したのは、フランスのグルノーブルにある INRIA という国立研究所です。2009 年 4 月から 2010 年 3 月までの 1 年間、家族 5 人で 1 軒屋で過ごしました。よく「どうしてアメリカではなくヨーロッパ、しかもフランスなんですか」と聞かれますが、海外研修に行くことが決まってから、私自身もアメリカかヨーロッパで迷いましたが、博士課程の時に既にアメリカで研究した経験があったので、今度はヨーロッパに、という単純な理由が大きかったように思います。

特に、今回滞在したグルノーブルは、ヨーロッパアルプス近くの自然の美しい街で、INRIA はさらに市街から 20 分程離れたところにあり、ヨーロッパの田舎暮らしの良さを十分満喫することができました。このような美しい自然の中で研究に没頭できるフランスの研究者達は実にうらやましいと思いつつ、アルプスを横目に眺めつつ自転車で研究所に通う日々でした。

2. INRIA について

INRIA は、情報学に関する国立研究所で、研究員の話では、国立研究所 CNRS の一部門から派生してできたということです。INRIA 自体は、今回私が滞在したグルノーブル以外にも、パリや南仏などに複数あり、それぞれが割と独立した運営をしているようです。私の在籍していたグルノーブルは、近未来的な玄関デザインが素晴らしく、一度来た人は決して忘れることの

ない印象的な建物に、約 800 名程度が在籍しています。

INRIA グルノーブルの研究体制は、規模の異なる複数グループの集合からなり、それらは固定されたものではなく、常にメンバーやテーマを変えながら研究を進めています。私の所属していたグループも、私が来た当初は 5 人研究員がいましたが、途中で 2 人が別グループに移るなど、組織の自由度とダイナミズムを目の当たりにすると同時に、運営の難しさも感じました。

また、各グループは、研究員の下にポスドクや博士課程の学生を加えた構成が基本で、これに夏の間だけ海外から来る学部や修士学生のインターン生が加わると言う感じでした。このため私の所属するグループは、私が来てから続々と人が増え始め、夏の間はインターン生を加えると 30 名近くはいたと思います。いつもグループ全員で昼食に行くのですが、夏の間は毎回席の確保が大変でした。国籍は、私のグループでは半数以上はフランス以外の出身でしたが、これは特に例外的という訳ではなく移民の国であることを実感させられます。特に私のグループはインド人の博士学生が多かったのですが、その他にもポスドクの出身はイギリス・イタリア・チェコ・スペインと、ランチ時のお国自慢の話題には事欠きませんでした。

ポスドクやインターン生の雇用に関しては、INRIA のグループどうして協力するだけでなく、外国の大学や研究機関と共同して、フランスのみならず EU の大型プロジェクトにも応募して予算を獲得しているようでした。私が在籍している間にも、採択されたプロジェクトで新たに 3 名のポスドクを雇用していました。そういう状態のためポスドクのポジションは INRIA に限らずヨーロッパ全体を見れば常にあるようですので、これからドクターを取得される方は、日本やアメリカだけではなく、是非フランスでもポストを探してみたら良いのではないのでしょうか。

3. 研究生活・教育システム

INRIA における研究スタイルは、私のグループでは基

本的に一人または複数の研究員が、複数のポストドクや博士学生を指導しながら研究を進めるスタイルでした。博士取得には日本同様、約3年かかり、メジャーパブリケーションが2つくらいは必要ようです。また、これは特に INRIA に限った話ではないようですが、博士学生には留学生が多いようです。ドクター取得が近づくと、条件の良いポストドクのポジションや、優良企業や研究所のポストを求めて就職活動を開始するのはどの国も変わりませんが、その範囲が世界全域であることは日本とは随分違うと感じました。

余談になりますが、フランスでは幼稚園から大学まで学費を払う必要が無く、研究者ビザの私の子供達も無料でしたが、フランス語を教える教師が私の子供達のためだけに小学校に来てくれるのには驚きました。学校自体は、日本同様、詰め込み教育に近い内容で、小学校1年生の娘も毎日宿題がありました。また、少し面白い点として、小学校までは土日に加えて水曜も休みのため、子供のいる家庭は水曜は家族と過ごすために午後から帰る人が多く、カフェも水曜はいつもがらがらでした。グルノーブルでは、日本人学校がそれに合わせて水曜にあり、そこに行くのが私の子供達にとって大きな楽しみの一つでした。

4. 普段の生活について

ヨーロッパ、特にフランスというと、労働時間が短く休暇も多く、さらに夏の長期休暇(バカンス)をすぐに想像されるのではないのでしょうか。INRIA も多分にもれず皆しっかり休みます。日々の様子としては、朝は普通に9時くらいに始まりますが、帰りは6時を過ぎると2~3人を残してほとんど居なくなります。7時を過ぎて部屋にいと「残業大変だね」という感じになり、8時以降にはほとんど誰も居ません。以前アメリカにいた時、スタッフは同じような感じでしたが、学生達はかなり遅くまで研究していたので、インターン生含めて皆居なくなるフランスの状況に最初は少し驚きました。バカンスも夏と冬の2回、1週間~2週間程度、誰もがとります。

その分、余暇を楽しむための工夫は怠りなく、土日に何をするか困ると言うことはほとんどありません。近くに美しい山々や公園、お城があり、夏は近くの湖に泳ぎにでかけ、冬は近くの山でスキーと、お金をかけずに楽しく過ごせます。

食べ物も、チーズやバゲット、ワインはいつも安くておいしく種類も豊富なので、毎回いろんな種類を購入しては挑戦していましたが、1年の滞在ではとても全てを味わうことは出来ませんでした。特に冬のチーズフォンデュは贅沢ですが最高のご馳走でした。

5. フランス語について

行く前は言葉の不安がかなりありましたが、実際にフランスに来てみると、街に買い物に出たり食事をする時などに、多少のフランス語が必要ですが、それでも思った以上に英語が通じるため、単身であれば何の問題も無く過ごせそうでした。ただ、私の場合、家族で来ていたので、子供達の学校との連絡や、病気の時に医者に症状を説明したり薬の処方を知ったりと、妻と子供達は最初の頃はかなり大変だったようです。

私自身は、ほぼ全ての研究打ち合わせが英語のため、困ることはほとんどありませんでしたが、移民の多いお国柄のせいか、特にマネージメント側の人は誰もが英語堪能なのは勿論のこと、さらにもう一ヶ国語くらいは普通にしゃべれるようでした。

また、フランス語に誇りを持っているフランスでさえも、小学校2年から英語教育を始めている現実を見ると、今の日本の語学教育の状況には強い危機感を感じました。調べてみたところでは、日本ほどのんびりと英語教育を開始する国は他に無いようで、毎日自分の子供に漢字100字を書かせながら、習得すべき漢字の数を半分に減らしたら、その時間を英語やフランス語、中国語などに回せるのになあ、などと想像していました。

6. 終わりに

フランスに滞在して驚いたのは想像以上の親日ぶりでした。これに、日本の映画やアニメ、漫画の果たしている役割は大きいようですが、それ以外にも、自然を愛でる気持ちや、伝統的なものを大切に考える考え方など、お互いに共感できる部分が非常に多いことも大きな理由の一つのようです。改めて考えてみると、美しい自然や伝統芸能、食文化など、フランスで良いな、と思ったことは実は日本にもほとんどありました。そういう日本の良さに改めて気付けた点も今回の研修の大きな収穫でした。同時に、そういう素晴らしいものが、フランスにおいては今も大切にされ、他方日本ではどんどん失われている現実は少し悲しくも思いました。

最後になりますが、若い人には、フランスに限らず是非一度海外で研究生活されることを強くお勧めします。特に家族全員で行かれると良いと思います。こういうご時勢ですので、なかなか出て行くのも難しいですが、逆にこういう時だからこそ、外に出る重要性が増してきているようにも思います。

【略歴】

川崎 洋：東京大学卒。埼玉大学を経て、現在鹿児島大学理工学研究科情報生体システム工学科教授。コンピュータビジョン・グラフィクス、VRの研究に従事。